

La Informilo de Nagoja Esperanto-Centro

センター通信 280 5 marto. 2016

発行：名古屋エスペラントセンター Nagoja Esperanto-Centro
461-0004名古屋市東区葵一丁目26-10ユニール新栄301号
<http://homepage2.nifty.com/nagoja-esperanto/> <https://www.facebook.com/nagoja.esperanto>

2016年度名古屋エスペラントセンター総会のご案内

日程：3月19日(土)15時より総会議事

会場：名古屋エスペラントセンター

総会終了後、場所を移して、有志にて夕食会（会場未定）



Esperantistoj festas en Zamenhofa Festo Nagoja 2015

2016年度名古屋エスペラントセンター総会のご案内	1
Forpasis Nakahira Takuma..... マエダ	2
柘植已知彦氏逝去..... 鈴木善彦	3
読書会 “Ni legu” 報告..... 伊藤俊彦	6
Lasta Novaĵo de Japanio	8
米川五郎個展の案内	9
編集者から	9

Forpasis Nakahira Takuma, rememoroj pri li restos eterne en mia koro

Ĉi-jare ni havas longan aŭtunon kaj arbaraj folioj flavas kaj ruliĝas malrapide. Sed tagoj mallongiĝas kaj pli frue vesperiĝas. Mi preskaŭ ĉiutage ekzercas min en reko en la malgranda parko apud la elementa lernejo Yamabuki. Ofte mi ekzercas min en vespero kaj tiam lernantoj multe ludas diversajn ludojn.

Ŝajnas al mi ke nuntempa populara ludo por knaboj estas ne bazopilko sed piedpilko. Lastatempe rapida ŝanĝo okazis, do knaboj komencis ludi rugbeon. Ekirinte *Goroumaru*. Ho knaboj ĉiam ŝatas novan heroon, ili volas kredi esti *goroumaru*. Kompreneble ili ne uzas pilkon por rugbeo.



Ĉi-jare forpasis Nakahira Takuma kiu donis al mi fruktajn donacojn. Nakahira Takuma (1938 - 2015), fotisto, li fotis fotojn kiel nomata nuntempstila foto.

Nome en la 1960aj jaroj ekzistis tiuj fotistoj kiuj pensis, ke antaŭ ĉio ni forĵetu penson aŭ pensmanieron pri la mondo en ĝi.

Ĉio povas esti certa. Ili eldonis la gazeton "Provoko". Kolektiĝis junaj talentaj fotistoj. "Provoko" montris aŭ montrus al ni direkton de foto-esprimo laŭ sia propra sento. "Provoko" detruis normaran estetikan vidpunkton de fotografaĵo kaj prilumis tiaman situacion.

Nakahira Takuma estis unu el la ĉefaj membroj de "Provoko". Li intence rompis tradician esprimon de normala fotisto por montri sian propran senton pri la nuntempaj pejzaĝoj. Liaj fotografaĵoj estas kiel figuroj-malprecizaj, nebulaj, forfokusigaj, raspaj, ŝagrinaj kaj maldelikataj, sed la bildoj povas fari al ni ian alian aspekton. Ankaŭ homoj aperis unu el partoj de pejzaĝoj.

Li kreis novajn fotografaĵojn tiom esprimriĉa, ke li mem ne povis superi tiamajn fotografaĵojn laŭ mia opinio. Nakahira ne plu estas en la mondo sed lia esprimriĉa fotografaĵo kiun li lasis al ni vivos en mia koro. マエダ

つげみちひこ 柘植已知彦氏逝去

柘植已知くんが亡くなったとの連絡が入ったのは2015年12月31日の夕方でした。その日の午前中お母さんを病院に送って行き、待合室にいた時に倒れ、救急病院に転送されるも助からなかったとのことです。動脈剥離で即死状態であったためほとんど苦しまなかったのではないかとのことでした。正月の1月2日が通夜、3日が告別式で、式は柘植くんの地元（愛知県東浦町緒川）の花秀ホールで行われました。名古屋エスペラントセンターからは有志（後藤正治、前田可一、湯浅典久、伊藤浩治、伊藤俊彦、鈴木善彦、山口真一、猪飼吉計）により、花輪1対をお供えしました。



柘植くんとは12月12日に名古屋エスペラントセンター事務所で開催されたザメンホフ祭で会ったばかりで、その時は元気だったこともあり、突然の訃報に非常に驚きました。

柘植くんは私と学年は異なりますが、同じ年1953年（昭和28年）の6月生まれで満62歳、毎年健康診断も受けており、特に病気の兆候もなかったとのことで、早すぎる突然死としか言いようがありません。

柘植くんは1972年に愛知大学（豊橋校舎）に入学、横山善一、出野隆雄くんなどと愛知大学エスペラント同好会（研究会）に所属していました。当時は名古屋を中心とした東海地区の10大学ほどのエスペラント研究会が参加していた東海学生エスペランティストロンド連合があり、合宿を行うなど、大学間での交流が活発でした。その一員として、瑞穂区役所においてロンド連合が東海連盟と共催した1973年12月9日のザメンホフ祭に参加して以来東海大会やザメンホフ祭の常連となりました。

名古屋エスペラントセンターは1974年の発足ですが、柘植くんは大学卒業後、名古屋にあるセンターに顔を出すようになり、1977年には影山実氏の図書販売を手伝い始めました。1979年にセンター委員となり、その後センター委員会を始めセンター合宿などのセンターの企画事業にはいつも真面目に顔を出していました。仕事や家の都合で忙しくなったこともあり、退任した1995年の3月まで16年間の長きに渡り会計、広報（センター通信）、蔵書担当委員を歴任しました。

仕事で保険の代理店をしていたことから分かるように、几帳面で計数能力に優れ、会計処理が得意であったため、主に会計担当としてセンターを支えてくれました。

センター通信の担当としては1987年4月から1989年3月まで（122号～138号）の2年間、また1981年の71号・72号は代理編集を、1989年から1991年の間には持ち回り編集で4回分センター通信を発行しました。

また一時、蔵書の担当をした時期もあるなど広い分野で地道にセンター活動を支えてくれました。退任後は直接的なセンター活動へのコミットはなくなりましたが、亡くなるまで会員として、遅れることなくいつも翌年以降の分まで会費を払い込んでくれてい

ました。

柘植くんは、長年、お父さんを自宅で介護していたため、夜の会合には出られませんでしたが、山歩きが好きだったこともあり、センター仲間の後藤正治さん、伊藤俊彦さん、湯浅典久さんと私とでよく、日帰りできる近くの山を歩いたものです。そのお父さんも2012年1月13日に亡くなり、最近ようやく落ち着いてきたということで、再度センター委員の仕事を手伝ってもらえそうな矢先の突然の死は、センターの活動にとっても大きな痛手に思えます。

個人的にも、60歳を過ぎた者同士、これからゆっくりと山を歩いたり、エスペラントの勉強や活動と一緒にやりたかったのですが、非常に残念でたまりません。

友人として、改めて、ご冥福を心からお祈りいたします。

鈴木善彦 (SOJO)

読書会 “Ni legu” 報告

伊藤 俊彦

直近4回分の読書会の報告です。終了後、名古屋エスペラントセンターの Facebook ページで報告したものを一部加除修正の上、再録しています。

○11月25日 (水)

参加者は、米川、前田、鈴木、伊藤の4名。山田さんは風邪でお休みでした。今回は Monato 10月号を読みました。

まずは、この9月にウィーンに着いたシリアからの難民について報告する記事を読みました。西駅での難民の様子を撮影した臨場感あふれる写真が表紙と紙面を飾っています。パリでの同時多発テロもあり、ヨーロッパで難民の置かれた状況も短期間ですっかり変わってしまったようですが、この記事は難民に好意的な筆致で書かれているという印象です。

次いで、第二次世界大戦前から戦中にかけての難民に関する記事を読みました。当時上海の虹口地区にあった、いわゆる「上海ゲッター」に関する記事です。ここはナチスの迫害を逃れてヨーロッパを脱出してきたユダヤ人が住んでいた地区です。そこに居住していて当時の様子をよく記憶している92歳の中国人の老人が、ユダヤ人に部屋を貸していたこと、彼らが朝から晩まで勤勉に働いていたことなど、ユダヤ人の思い出を語っています。

最後に、In Flanders Fields についての書評を読みました。本書は同名の詩で有名なカナダの軍医にして詩人であったジョン・マクレーの評伝のエスペラント訳です (2014

年刊行。原著は1992年刊行）。馴染みのないオランダの作家のことがマクラに振ってあったりして、第一次世界大戦当時の事情をある程度知り、かつ本書を読んだことがないと、何が書いてあるのか理解が難しいですね。米川さんはこの詩人に大いに関心を持たれ、原詩（英語）を参加者に配布して議論を盛り上げられました。なお、センター通信279号（2015年11月18日発行）に伊藤が同書の書評を書きましたので、ごらんいただければ幸いです。

ということで、今回は、現在ヨーロッパで大問題となっている難民に関する記事、第二次世界大戦前から戦中にかけてヨーロッパから中国に逃れてきた難民に関する記事、そして第一次世界大戦で倒れた死者の視点から書かれた詩をめぐる記事と、図らずも戦争に関わる記事ばかり3編を読むこととなりました。他にもイランの核開発に関する記事や、ポーランドとスロヴァキアとの武器の共同開発に関する記事、世界中に蔓延する麻薬に関する記事などが掲載されていて、今回の Monato は、いかにも動乱の世界を象徴するような記事が多いという印象でした。

なお、石川尚志さんは、アメリカへの軍事的従属を強める安倍政権の姿勢、東京オリンピックをめぐる相次ぐトラブル、難民に対する日本政府の消極的対応、日本とギリシャの債務の比較という4つのテーマについて、それぞれ記事を執筆しておられます。

○12月16日（水）

参加者は、米川、山田、前田、鈴木、伊藤の5名。今回は Monato 11月号を読みました。Ni legu 終了後は、場所を近くの居酒屋に移し、5人のメンバーで忘年会。大いに飲みかつ談論風発し、最後に記念写真を撮って散会。

さて、読書会では、全体をひととおりにめくって眺めたあと、最初にオーストリアの Walter Klagさんの記事を読みました。氏は、オーストリアの現在をさまざまな角度から取り上げる記事を毎号精力的に投稿していて、10月号にもウィーンにたどり着いたシリア難民に関する記事を執筆しています。

今回読んだのは以下の3本です。ひとつ目は、ウィーンの旧市街をぐるりと取り囲むように走る環状道路のリングシュトラセから自動車を締め出し、歩行者空間化するイベントについての記事です（p7）。ふたつ目は、ウィーンで、ソーシャルネットからこぼれ落ちた人たちや難民などに住まいを提供する運動を長年にわたって続けてきた Ute Bock さんに関する記事です（p14）。最後は、移民の流入などにより家賃や住宅価格が高騰していることから、2,000戸を目標として公営住宅の建設に乗り出したウィーン市の住宅対策に関する記事です（p17）。

なお、三つ目の記事には「赤い公共住宅」として有名なカール・マルクス・ホーフの写真が掲載されています。これは1920年代に社会民主党市政のもとで建設された世界最初の集団的公共住宅で、今でも全長1,100メートルにわたって赤い外壁が続く様子は圧巻です。住宅問題の現状を論ずる記事にも、こうして歴史が引照されているのは興味深いことです。

続いて、フィンランドの Saliko さんによるノルウェーのクルージングに関する記事を読みました（p 18～20）。これは、ノルウェー西岸のベルゲンを出発し、ノルウェー海岸沿いを北上して最北端のノールカップ岬を経て、ロシアとの国境に近いチルケネスに至る 6～7 日のコースです。船会社の歴史、各地の見どころ、船内のイベント、食事などを写真入りで紹介し、とりわけ年金生活者に対して秋から冬のクルージングへの参加を誘っていて、興味深く読みました。

そのほか、今回、テキストそのものを読むことはしませんでした。イギリス労働党の党首に左派のジェレミー・コービンが選ばれたこと（p 8～9）、ノルウェーの地方選挙で緑の党が躍進したこと（p 10）など政治に関するニュースが掲載されています。さらに、中国、韓国、それからラオスにおける犬の肉を食べる食習慣に関する石川尚志さんの記事（p 16）、和服についての瀬下政也さんの記事（p 15）、また、イギリスで、日本の陶芸家の石田和也氏の参画のもと、伝統的な穴窯により陶器を作る試みが行われたという記事（p 12～13）などが掲載されていて、今月号も盛りだくさんです。

また、トーマン・マンの『ヴェニスに死す』のエスペラント訳の改訂版が刊行されたという記事（表紙 2）も掲載されていて、マンについての文学談議に花が咲きました。

○1月29日（金）

参加者は山田、前田、伊藤の 3 名。今回読んだのは Monato 12月号です。

まずは、編集長の Paul Gubbins さんの El mia vidpunkto から読み始めました。ところが、これがなかなかの難物、わずか 1 ページを読むのに 1 時間余もかかってしまいました。筆者がバッキンガム宮殿の前で、たまたま一枚の紙切れを拾ったところ、それがなんとエリザベス女王の日記の一部で、女王は、11 月にイギリスを訪問した中国の習近平主席に対してあけすけな批判をぶちまけていた、というお話。女王は、かつては栄華を誇った大英帝国の落日と、それに代わる「現代のバイキング」、「東洋の植民地主義者」たる中国の台頭ぶりとを皮肉に書いていたのです。

もちろん、女王の日記などが落ちているはずもなく、これは風刺というか戯文なのですが、こういう皮肉とひねりの利いた、ソフィスティケートされた文章は日本の雑誌ではまず見かけることもなく、やっぱりヨーロッパのインテリにしか書けないのでしょうか（そういえば、昔、加藤周一の『真面目な冗談』という本を読んだのを思い出しました）。表題の Vestoj kaj investoj というのも、（うまいかどうかはわかりませんが）無論、シャレですね。なお、日記では、女王は夫フィリップのことを nia edzo と呼んでいます。この ni はむろん、日本語なら「朕」、「余」にあたる君主の自称ですが、女王でも「朕」と訳していいのかしら、などと話に花が咲きました。

そのあとに読んだのが、原発の再稼働をめぐる石川尚志さんのレポート。書かれている内容について、あらかた知っているせいもありますが、やっぱり日本人の書くエス

ラント文はわかりやすくいいですね。今回はここまでで時間切れとなりました。

さて、これまで7回にわたって Monato を読んできましたが、今回でひとまず Monato はおしまいにして、次回からは“Mara stelo”で親しんだ Julian Modest さんの最新短編小説集“La viro el la pasinteco”を読むことになりました。

○2月24日（水）

参加者は山田、前田、鈴木、伊藤の4名。今回読んだのは Julian Modest “La viro el la pasinteco” 冒頭の3編“La viro el la pasinteco”、“Amo”、そして“Ilona”です。初めの2編については、理解できない箇所、疑問を感じた箇所などについて議論しつつ、その描写を味わいました。“Ilona”については、交代で音読し、大意を要約しながら、やや丁寧に読み込みました。

最後の作品についてストーリーをちょっと紹介します。主人公の若者は、ベルリンで行われる音楽フェスティバルに参加するため、ソフィアからベルリンへ鉄道旅行する途中でつい眠りこけてしまい、その間に現金やパスポート、それに大切なギターを盗まれてしまいます。仕方なしに深夜のブダペストで下車し、駅の待合室で途方に暮れていると、向かいのベンチに座っていたひとりの魅力的な若い女性が話しかけてきて…。

ブダペストの美しい夜の景観が彷彿とするような、遠い青春の思い出です。ある参加者は、世界大会で出会った美女のことを思い出して感慨に耽っていました。どんな美しい体験があったのでしょうか。

作者の文体はきわめて平明達意で、心にしみる内容のお話ばかりです。読書好きの方のご参加をお待ちしております。



Je la 14a de februaro, **la Tago de Valentino**, japanaj virinoj donacas ĉokoladon al viroj, kiujn ili sekrete amas, por konfesi sian amon al ili. Tiu ĉi japana moro komenciĝis pro iu nekonata kaŭzo ĉirkaŭ la jaro 1970.

En Eŭropo kaj Usono, kie oni jam de longe observas la Tagon de Valentino, oni interŝanĝas florojn, kukojn k.a. sen distingi sekson. Eĉ en Ĉinio, precipe en grandaj urboj kiel Pekino kaj Ŝanhajo disvastiĝas la tago de Valentino lastatempe kiel la tago, en kiu viroj ĝenerale donacas florojn ktp. al virinoj male de la japana moro.

La Japana Datreveno - Asocio prikalkulis, ke la ekonomia efiko de la tago de Valentino ĉi-jara sumiĝos al ĉ. 134 miliardoj da enoj. Rilate amplekson, tiu ĉi efiko tute ne atingas tiun de Kristonasko sed superas tiun de Haloveno kaj la Tago de Patrinoj.

Laŭ la disvastiĝo de la Tago de Valentino, la ricevintoj de la donacoj kiujn virinoj donacis, multe ŝanĝiĝis kompare kun la unuaj jaroj. Evidentiĝis en enketo farita de la manĝaĵ-firmao Glico, ke "amikinoj" okupas la unuan rangon kiel ricevintoj de la donacoj. Nur 9 procentoj da enketitoj respondis, ke ili donacis ĉokoladojn al siaj "amatoj aŭ amontoj". Ŝajnas, ke la rolo de ĉokolado kiel konfeso de amo malgrandiĝas lastatempe.



Tio signifas, ke nun "interŝanĝo de ĉokoladoj inter virinoj" motoras la merkaton. Laŭdire tiu ĉi tendenco disvastiĝis inter mezlernejaninoj en la unua duono de la 2000-aj jaroj. La kutimo donaci ĉokoladojn al viraj altranguloj kaj kamaradoj en la laborejo, vaste okazinta antaŭe, rimarkinde malmultiĝis lastatempe ĉar multaj kompanioj praktike malpermesis la kutimon.

La kombinaĵo de la Tago de Valentino kaj ĉokolado naskiĝis per la klopodoj de profitĉasaj manĝaĵo-firmaoj en Japanio sed la grandaj merituloj kiuj kreskigis tiun kutimon en unu el la reprezentaj eventoj en vintro, ŝajne estas la personoj kiuj turnis sian atenton al la japana tradicio, en kiu estas profunde enradikita la kul-

turo de donacado kaj redonacado kiel videblas en jarmezaj kaj jarfinaj donacoj.

Oni povas ricevi sugeston pri sukceso de komerco ie ajn streĉante la atenton kaj cerbon. La Haloveno okazanta precipe por infanoj en Eŭropo kaj Usono, multe ŝanĝiĝis dum la lastaj dudek jaroj en Japanio al propra evento, en kiu ankaŭ alivestiĝantaj plenaĝuloj iras sur la straton, influite de regulaj paradoj, okazantaj en Tokia Diznejlando kaj la ubro Kawasaki de la gubernio Kanagawa k.a. La tagoj de Valentino kaj Haloveno rimarkigas nin pri io grava por ni, kiu ne estas kalkulebla per ekonomia efiko.

米川五郎さん個展の案内

3月25日（金）から31日（木）にかけて、愛知県岩倉市にある「えほんのもり」で米川五郎「パソコン版画」展を開催します。

米川五郎さん（愛知教育大学名誉教授）は、名古屋エスペラントセンターの読書会に毎回出席する熱心なエスペランチストです。早くから絵画に深い関心を持ち、87歳の現在も制作を続けています。今回は初の個展で、「パソコン版画」と名づけた独自の手法により、女性や少年や夢や幻想などを鮮やかな色彩で描いた作品を多数展示する予定です。

ぜひお越しいただき、米川さんの作品をごらんください。米川さんの作品と一緒にパソコン版画についての思いを綴ったカラー刷りのインビートを準備しております。エスペラントも添えてあり、来場者は記念にいただけるとのことです。

なお、3月26日（土）午後4時から「えほんのもり」でこの個展のオープニングパーティを行いますので、飲み物とおしゃべりと作品をお楽しみください（無料）。

「えほんのもり」は、絵本や児童文学を中心とする私設図書館で、美術展やコンサートなどもたびたび開催しています。また、この個展に対しては名古屋エスペラントセンターが後援しています。（えほんのもり・伊藤 俊彦）

規約より抜粋（維持費）「センター」の維持員は、維持費拠出高によって、A、B、C、Dに分け、維持費は次のとおりとする。

維持員A：毎月 500円を維持費として拠出する者

維持員B：毎月1000円を維持費として拠出する者

維持員C：毎月2000円を維持費として拠出する者

維持員D：毎月3000円を維持費として拠出する者

維持員は、維持費6カ月の滞納で、その資格を失う。

郵便振替 00840-8-40765 [名古屋エスペラントセンター]

編集者から ▶今号には今年の総会の案内があります。ほとんど委員だけの総会の時もありましたが最近、年末のザメンホフ祭とともに春の総会は久しぶりの再会を楽しむ機会となっています。おでかけください。▶名古屋の中心地のビルの3階に部屋を借りて活動しています。維持員としてご協力いただけることを感謝します。維持費は総会時にも納入できますが上記郵便振替もご利用いただけます、と会計からの伝言です。▶インターネットでも読めますが、日本のバレンタインデーの紹介 la Tago de Valentino を今号もこれを書いた沖田和海さんのお許しをいただき載せました。時事の話題をエスペラントで読むのも面白いですね。amo と書いた緑のチョコレートを読者の皆さんに差し上げたく、米川さんの“Pentraja de la muso”をまねて私がマウスを使って描いてみました。▶ザメンホフ祭の記念撮影に間に合わなかった方数人は合成で取り込みました。報告記事の原稿が今日までないので載せてありません。▶今回は校正を山本修さんに引き受けていただきました。いつもありがとうございます。（山田 義）

— 87歳の挑戦・初めての個展 —

米川五郎「パソコン版画」展

えほんのもり

2016年3月25日(金)～31日(木)

「夢」 Songō 2015



米川五郎氏は、愛知教育大学などで長らく教鞭を取るかたわら、若年のころから絵画に深い関心を持ち、87歳になる現在も精力的に作品の制作を行っています。1990年には同好者と「煉瓦の会」を結成し、毎年、東京の画廊で合同展を開催してきました。とりわけ60歳を過ぎてからパソコンで絵画を描く手法を追求し、「パソコン版画」と名づけて、合同展に10数年にわたり出展し続けています。今回の展覧会では、この手法により描かれた作品20数点を中心に展示するとともに、青年時代に制作した旧作数点を展示します。この展覧会を通じて、静かで瞑想的な雰囲気に満たされたその作品世界を多くの方々に味わっていただければ幸いです。

米川五郎（よねかわ ごろう）氏プロフィール

1928（昭和3）年、茨城県大洗町生まれ。愛知教育大学名誉教授 及び「あいちシルバーカレッジ」講師。県立水戸中学校、海軍兵学校（半年修学）、旧制水戸高等学校を経て、旧制東京大学農学部大学院前期修了。安城学園短大、愛知教育大、愛知大に勤務。早くから国際共通語エスペラントに傾倒し、今も読書会に参加する。また、海外のエスペランチストとメールを通して交流している。主な著書：「食生活論 第3版」2002 有斐閣（馬路氏と編著）、「消費者教育のすすめ 新版」1994 有斐閣（小木・高橋両氏と編著）、「米川 五山子句集 初夢」2001 近代文芸社（よねかわ ごさんし、俳号）、ほか多数。

と き 3月25日（金）～31日（木）午前10時～午後5時

と ころ えほんのもり（愛知県岩倉市下本町下市場160番地5）

名鉄犬山線岩倉駅下車。東口を南へ。三菱東京UFJ銀行を過ぎて跨線橋
手前20メートルを左折、30メートル左のアパート（コーポ伊藤）1階

入場料 無料 **連絡先** 090-6075-0135（伊藤）

後 援 岩倉市 岩倉市教育委員会
名古屋エスペラントセンター

